



○菅波茂（AMDA代表） 結論は、私が申し上げるまでもなく「済生丸が必要である」ということです。1つ非常に重要な点を挙げますと、離島は「お荷物なのか財産なのか」ということです。もし、お荷物であるなら、どうしてこれ以上税金を使う必要があるのか、ということになります。私は、他人の助けを無くしては生きられない人たちは「弱者」と考えます。弱者が最も必要としているのは何かと申しますと、「自分は見放されていない」という社会

からのメッセージです。これは、阪神大震災のときも、今回の東日本大震災においても言えることです。この意味において、高木市長さんが、済生丸を通じて離島医療を徹底されていることは、「絶対に弱者を見放さない」という強いメッセージであると思います。

政治は信がもとだと言いますが、信とは裏切られないということでもあります。この意味において、済生丸が果たす役割は大きいと思います。私は、済生丸の医療活動は、医療行為を通じて弱者に「あなた方を見放しません」というメッセージを伝えている重要な方法論であると考えます。

しかしながら、私たちは援助を受ける側にもプライドがあることを決して忘れてはなりません。自分も社会から認められたい、必要とされたいという欲求をどのように克服していくのが、済生丸事業の最も鍵となるところだと考えます。弱者のプライドを無視した一方的な慈善事業は、弱者の尊厳を破壊してしまうからです。この意味において、私は2つの新しい時代が来ていると思うのです。

2011年3月11日に起きた東日本大震災は、私たちにとって一体何だったのでしょうか。1995年の阪神大震災は「ボランティア元年」と呼ばれ、全国から100万人の人が駆けつけました。今回の震災では、発生直後から現在まで、朝日新聞の政治部長さんの話によると既に800万人の方が被災地に駆けつけています。これは、私たちがお互いに喜びを共有し合う時代に入ったことを意味します。これらの事実は、日本は世界に先駆けて価値変換の最先端を走っていると言っても過言ではありません。喜びを共有するワールドバリューで大切なのは、先ほどの例においては「手を差し伸べる側」と「差し伸べられる島の人々」がお互いに学び合う中で、次世代の人材育成に貢献しているという事実を認識することです。済生丸の事業には、アカデミズムの土居先生に是非とも正式な事業名を考えて頂き、成果を形にして頂きたいと思います。更に、済生会からも正式に島の方々へ宛てて委任状を出すべきであると考えています。事業の形を整えていく作業により、援助を受けている人たちの立場とプライドを保ち、「私たちはあなた方が必要です」という確固たるメッセージを送り続けることが出来るのです。

人材育成についての提案ですが、グローバル社会の中で人材育成を真剣に考えるのであれば、今回お越し頂いたフィリピン国軍准将ラカニエンタ氏のお国における離島医療あるいはフィリピンにおける済生丸的な活動について学ぶ機会を創ってみてはと思うのです。

例えば、フィリピンの医学生を日本に招き、日本の将来の医療を担う若者たちと一緒に日本のへき地医療、また島嶼医療について考える研修を行うのです。交流の中で、お互いの国の文化に触れることも重要な要素です。私は文化を「集団の価値判断」と定義します。もちろんそれは、